

余が翻訳の標準

二葉亭四迷

青空文庫

翻訳は如何いか様ようにすべきものか、其の標準は人に依つて、各異おのおのろ
うから、もとより一概に云うことは出来ぬ。されば、自分は、自
分が従来やつて来た方法しかたについて述べることにする。

一体、欧文は唯だ読むと何でもないが、よく味うて見ると、自
ら一種の音調があつて、声を出して読むとよく抑揚が整うている。
即ち音楽ミュージカル的である。だから、人が読むのを聞いていても中々に
面白い。實際文章の意味は、黙読した方がよく分るけれど、自分
の覚束ない知識で充分に分らぬ所も、声を出して読むと面白く感
ぜられる。これは確かに欧文の一特質である。

処が、日本の文章にはこの調子がない、一体にだらだらして、

黙読するには差支えないが、声を出して読むと頗る モノトナス 単調だ。
啻ただに抑揚などが明らかでないのみか、元來読み方が出来ていない
のだから、声を出して読むには不適當である。

けれども、苟いやしくも外国文を翻訳しようとするからには、必ずや
その文調をも移さねばならぬと、これが自分が翻訳をするについ
て、先ず形の上の標準とした一つであつた。

そこで、コンマやピリオドの切り方などを研究すると、早速目
に着いたのは、句を重ねて同じことを云うことである。一例を挙
ぐれば、マコーレーの文章などによくある *in spite of* の如きはそ
れだ。意味から云えば、二つとか、三つとか、もしくは四つとか
で充分であるものを、音調の関係からもう一つ云い添えるという

ことがある。併し意味は既に云い尽してあるし、もとより意味の違ったことを書く訳には行かぬから仕方なしに重複した余計のことを云う。

これは語の上にもあることで、日本語の「やたらむしよう」などはその一例である、或は「強く厳しく彼を責めた」とか、或は、「優しく角立たぬように説得した」とか云う類は、屢々しばしば欧文に見る同一例である。これらは凡て文章の意味を明らかにする以外、音調の関係からして、副詞を入れたいから入れたり、二つで充分に足りている形容詞をも、一つ加えて三つとしたりするのである。コンマの切り方なども、単に意味の上から切るばかりでなく、文調の関係から切る場合が少くない。

されば、外国文を翻訳する場合に、意味ばかりを考えて、これに重きを置くと原文をこわす^{おそれ}虞がある。須らく^{すべか}原文の音調を呑み込んで、それを移すようにせねばならぬと、こう自分は信じたので、コンマ、ピリオドの一つをも^{みだ}濫りに棄てず、原文にコンマが三つ、ピリオドが一つあれば、訳文にも亦ピリオドが一つ、コンマが三つという風にして、原文の調子を移そうとした。殊に翻訳を為始めた頃は、語数も原文と同じくし、形をも崩すことなく、^{ひと}偏えに原文の音調を移すのを目的として、形の上に大変苦労したのだが、さて実際はなかなか思うように行かぬ、中にはどうしても自分の標準に合わすことの出来ぬものもあつた。で、自分は自分の標準に依つて訳する丈けの^{うで}手腕がないものと諦らめても見た

が、併しそれは決して本意ではなかつたので、其の後^{のち}とても長く形の上には、此の方針を取つておつた。

処で、出来上つた結果はどうか、自分の訳文を取つて見ると、いや実に読みづらい、佶^{きつ}偈^{くつ}聲^{ごう}牙^がだ、ぎくしやくして如何にとも出来栄えが悪い。従つて世間の評判も悪い、偶々^{たまたま}賞美^まして呉れた者もあつたけれど、おしなべて非難の声が多かつた。併し、私が苦心をした結果、出来損つたという心持を呑み込んで、此処が失敗していると指摘した者はなく、また、此処は何^どの位まで成功したと見て呉れた者もなかつた。だから、誉められても標準に無交渉なので嬉しくもなければ、譏^{そし}られても見当違いだから、何の啓発される所もなかつた。いわば、自分で独り角力を取つていた

ので、實際毀誉褒貶以外に超然として、唯だ或る点に目を着けて苦勞をしていたのである。というのは、文学に対する尊敬の念が強かったので、例えばツルゲーネフが其の作をする時の心持は、非常に神聖なものであるから、これを翻訳するにも同様に神聖でなければならぬ、就ては、一字一句と雖、いへども大切にせなければならぬとように信じたのである。

併し乍ら、元來文章の形は自ら其の人の詩想に依つて異なるので、ツルゲーネフにはツルゲーネフの文体があり、トルストイにはトルストイの文体がある。其の他凡そ一家をなせる者には各獨特の文体がある。この事は日本でも支那でも同じことで、文体は其の人の詩想と密着の關係を有し、文調は各自に異っている。従

つてこれを翻訳するに方つても、或る一種の文体を以て何人にも当て嵌める訳には行かぬ。ツルゲーネフはツルゲーネフ、ゴルキーはゴルキーと、各別にその詩想を会得して、厳しく云えば、行住座臥、心身を原作者の儘にして、忠実に其の詩想を移す位でなければならぬ。是れ実に翻訳における根本的必要条件である。

今、実例をツルゲーネフに取つてこれを云えば、彼の詩想は秋や冬の相ではない、春の相である、春も初しよしゆん春でもなければ中春でもない、晩春の相である、丁度桜花さくらが爛らんと咲き乱れて、少々やち散り初めそようという所だ、遠く霞かすみんだ中空なかぞらに、美しくおぼろおぼろとした春の月が照っている晩を、両側に桜の植えられた細い長い路を辿るような趣がある。約言すれば、艶麗うちの中にどっか

寂しい所のあるのが、ツルゲーネフの詩想である。そして、其の当然の結果として、彼の小説には全体に其の気が行き渡っているのだから、これを翻訳するには其の心持を失わないように、常に其の人になって書いて行かぬと、往々にして文調にそぐわなくなる。此の際に在ては、徒らにコンマやピリオド、又は其の他の形にばかり拘泥してはいけない、先ず根本たる詩想をよく呑み込んで、然る後、詩形を崩さずに翻訳するようにせなければならぬ。

實際自分がツルゲーネフを翻訳する時は、力めて其の詩想を忘れず、真に自分自身其の詩想に同化してやる心算つもりであつたのだが、どうも旨く成功しなかつた。成功しなかつたとは云え、標準は矢

張り其処にあつたのである。但だ、自分が其の間に種々^{いろいろ}と考え
て見ると、一体、自分の立てた標準に法つて翻訳することは、必
ずしも出来ぬと断言はされぬかも知れぬが、少くとも自分に取つ
ては六ヶ敷^{むつかし}いやり方であると思つた。何故というに、第一自分に
は日本の文章がよく書けない、日本の文章よりはロシアの文章の
方がよく分るような気がする位で、即ち原文を味い得る力はある
が、これをリプロヂュースする力が伴うておらないのだ。

で、外に翻訳の方法はないものかと種々^{いろいろ}研究して見ると、ジ
ュコーフスキー一流のやり方が面白いと思われた。ジュコーフス
キーはロシアの詩人であるが、寧ろ翻訳家として名を成している。
バイロンを多く訳しているが、それが妙に巧^{うま}い。尤も当時のロシ

アは、其の社会状態が小バイロンを盛んに生んだ時代で、殊にジユコーフスキーの如きは、鉄中錚々たるものであつたから、求めずしてバイロンの詩想と合致するを得て、大に成功したのかも知れぬが、兎に角其の訳文は立派なロシア文となつてゐる。

けれども、これをバイロンの原詩と比べて見ると、其の云い方が大變違ふ、原文の仄起そつきを平起ひようきとしたり、平起を仄起としたり、原文の韻のあるのを無韻にしたり、或は原文にない形容詞や副詞を附けて、勝手にせんさい剪裁さいしている。即ち多くは原文を全く崩して、自分勝手の詩形とし、唯だ意味だけを訳している。処が其の両者を読み比べて見るとどうであらう。英文は元来自分には少しおかつたるい方だから、余り大口を利く訳には行かぬが、兎に角原詩

よりも訳の方が、趣味も詩想もよく分る、原文では十遍読んでも分らぬのが、訳の方では一度で種々の美所が分つて来る、しかも其のイムプレッションを考えて見ると、如何にもバイロンのだ。

即ちこれを要するに、覺束ない英語でバイロンを味うよりは、ジユコーフスキーの訳を読む方が労少くして得る所が多いのである。

其処で自分は考えた、翻訳はこうせねば成功せまい、自分のやり方では、形に拘泥するの結果、筆力が形に縛られるから、読みづらく窮屈になる。これは宜しくジユコーフスキーの如く、形は全く別にして、唯だ原作に含まれたる詩想を發揮する方がよい。ところは思つたものの、さて自分は臆病だ、そんならと云うてこれを決行することが出来なかつた。何故かと云うに、ジユコーフ

スキー流にやるには、自分に充分の筆力があつて、よしや原詩を崩しても、その詩想に新詩形を附することが出来なくてはならぬのだが、自分には、この筆力が覚束ないと思われたからだ。従来やり来つた翻訳法で見ると、よし成功はしない乍らも、形は原文つかまに捉つてゐるのだから、非常にやり損うことがない。けれども、ジューコーフスキー流にやると、成功すれば光彩燦然たる者であるが、もし失敗したが最後、これほど見じめなものはないのだから、余程自分の手腕うでを信ずる念がないとやりきれぬ。自分はさすがにそれほど大胆ではなかつたので、どうもけん險呑のんに思われて断行し得なかつた。で、依然旧翻訳法でやつていたが、……

併しそれは以前自分が真面目な頭で、翻訳に従事した頃のこと

である、近頃のは、いやもうお話しにならない。

(明治三十九年一月「成功」)

青空文庫情報

底本：「平凡・私は懐疑派だ」講談社文芸文庫、講談社

1997（平成9）年12月10日第1刷発行

底本の親本：「二葉亭四迷全集 第一、二、三、四、七卷」筑摩書房

1984（昭和59）年11月～1991（平成3）年11月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：長住由生

校正：もりみつじゅんじ

2000年5月4日公開

2006年3月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

余が翻訳の標準

二葉亭四迷

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>